

1 研究主題について

(1) 特別支援学校の現状と課題

特別支援学校では、幼児児童生徒の障害の重度・重複化や多様化の状況を踏まえ、一人一人に応じた指導の充実が求められている。つまり、的確な実態把握を行い、教育的ニーズを明らかにして作成した個別の指導計画に基づき、障害の特性や発達段階に応じた指導をきめ細かに行うことが必要である。しかし、「指導者間での指導内容・指導方法の一貫性」や「教科等の系統性のある指導」、「個別の指導計画を生かした授業づくり」、「PDCAサイクルに基づく授業改善」など、様々な課題が挙げられている。

(2) 研究のねらい

特別支援学校においては、入学から卒業後までを見通した長期的な視点を持ちながら、一人一人の教育的ニーズに基づく指導内容や指導方法を明らかにし、幼児児童生徒の自立と社会参加を目指した取組が行われている。その中で、明らかになった教育的ニーズや指導内容、指導方法を、幼児児童生徒に関わる複数の指導者間で共有することが必要である。また、各学部段階で見直し、幼稚部から小学部へ、小学部から中学部へ、中学部から高等部へと、引き継いで共有していくことも必要である。こうした各学部段階での一人一人の教育的ニーズに応じた「一貫性のある指導」を行うためには、発達段階や生活経験、生活年齢などを踏まえて設定された教科等の目標や内容に基づく「系統性のある指導」が行われていることが前提となる。

このような「一貫性のある指導」と「系統性のある指導」が、日々の授業の中で、確実に行われていくことによって、幼児児童生徒のもつ能力や可能性を最大限に伸ばし、自立や社会参加を目指していくことができると考えられる。

そこで、本研究では、特別支援学校における「一貫性・系統性のある指導」の現状と課題を把握し、「一貫性・系統性のある指導」の在り方を明らかにして、その指導の充実を図ることをねらいとする。

(3) 「一貫性・系統性のある指導」の考え方

本研究では、特別支援学校における「一貫性・系統性のある指導」の「一貫性」、「系統性」について、次のように捉えることにした。

一貫性	入学から卒業後までを見通した長期的な視点で、一人一人の教育的ニーズや指導内容・指導方法などを明らかにし、指導者間及び学部間で共有すること
系統性	各教科等の目標や内容を、発達段階や生活経験、生活年齢などを踏まえて設定すること

2 実態調査について

(1) 調査の目的と内容

特別支援学校における「一貫性・系統性のある指導」に関する現状と課題を把握するために、全ての県立特別支援学校16校に対して、次の3点について調査した。

- | |
|---|
| <p>ア 教育課程の編成と実施の状況</p> <p>イ 個別の指導計画の作成と活用の状況</p> <p>ウ 知的障害のある児童生徒に対する授業づくりの状況
(生活単元学習, 国語, 算数・数学)</p> |
|---|

(2) 教育課程の編成と実施に関する調査結果

ア 各学校における「系統性のある指導」の工夫

- ・ 「指導内容一覧の作成」や「教科等部会などでの話し合い」などが多かった。
- ・ 「自校のチェックリストの活用」や「既習事項の確認ができるような指導の記録の実施」などの工夫をしている学校もあった。

イ 教育課程編成上の課題

- ・ 「一貫性・系統性のある教育課程の編成」や「障害の程度に応じた教育課程の編成」が多かった。

ウ 教育課程実施上の課題

- ・ 具体的な「指導内容・指導方法」に関することや「教育課程の評価・改善」、「授業時数の確保」に関する事が多かった。

【教育課程に関する課題(まとめ)】

- ・ 各学校において「系統性のある指導」のための様々な工夫がなされているが、児童生徒の発達段階や生活経験などを踏まえて、現在の取組を更に見直していくことが必要である。
- ・ 一貫性・系統性を意識して、教育課程の評価・改善を行うなどのシステムの検討を行っていくことが必要である。

(3) 個別の指導計画の作成や活用に関する調査結果

ア 指導目標の設定

- ・ 指導目標の設定に当たっては、「学校教育目標」や「学部教育目標」よりも、「実態把握」の結果の方が生かしやすいという傾向が見られた。
- ・ 卒業後の生活を意識した指導目標の設定については、小・中学部よりも高等部の方が意識しているという回答が多かった。

イ 複数の教師による見直し

- ・ 全ての学校で、複数の教師による個別の指導計画の見直しが行われている。
- ・ 同じ学校内であっても、学部によって見直しの時期や内容が異なっている学校があった。

ウ 引継会の実施

- ・ ほとんどの学校で引継会が実施されているが、引継ぎが十分に行われていなかったり、会の時間設定が難しかったりするという課題が挙げられている。

【個別の指導計画に関する課題(まとめ)】

- ・ 「一貫性のある指導」の更なる充実のためには、学校教育目標や学部教育目標、卒業後の生活などを、より一層意識しながら目標設定することが大切である。その一つの方法として、キャリア教育の視点を取り入れる工夫が考えられる。
- ・ 教科担当者や担任などの指導者間において、個別の指導計画の指導目標や指導内容などの検討や共通理解を一層進めるための工夫が必要である。

(4) 知的障害のある児童生徒に対する授業づくりに関する調査結果

ア 共通理解している指導の工夫

- ・ 学部で共通理解し、取り組みやすい工夫として「教材・教具の準備」、「学習の流れの提示」が挙げられる。
- ・ 共通理解はしているものの取り組みにくいものとして、「主体的な活動場面の設定」が挙げられる。
- ・ 共通理解も取組も難しいものとして「言語活動の充実」が挙げられる。

イ 研究授業以外の授業参観の機会

- ・ 授業参観の機会を設定している学校は、16校中7校であった。参観のための工夫として、「自由に参観できる期間の設定」や「参観の視点の設定」などが挙げられている。
- ・ 授業参観の機会を設定している学校の成果として、「教師間の共通理解の深まり」や「授

業改善のための新たな発見」,「系統性や将来を意識した目標や内容の設定」などが挙げられている。

ウ 一単位時間における児童生徒の学習評価

- ・ 児童生徒の学習状況の評価は,記述式で行っている学校が多かった。

エ 一単位時間における教師の指導の評価

- ・ 目標の妥当性や手立てなどの評価を,一単位時間ごとに行っていない学校が多かった。
- ・ 指導の評価を行っていない理由として,「評価の観点が分からない。」や「評価の観点が統一されていない。」,「評価する時間の確保が難しい。」などが挙げられている。

【授業づくりに関する課題(まとめ)】

- ・ 授業づくりを充実するためには,「主体的な活動場面の設定」や「言語活動の充実」など,共通理解しにくい,取り組みにくいと回答された指導の工夫や教師の指導の評価を,どのように進めればよいかなど,その方法を明確にすることが必要である。
- ・ 授業づくりの方法を明確にすることは,授業参観や授業研究を活発化し,「一貫性・系統性のある指導」につながっていくと考えられる。

(5) 特別支援学校における「一貫性・系統性のある指導」に関する課題(まとめ)

発達段階や生活経験などを踏まえて,チェックリストの活用や教科等部会等の話し合いなど,これまでの取組を見直すことが必要である。
教育課程の編成における評価・改善,引継ぎのシステムを検討することが必要である。
教科担当者や担任などの指導者間における,指導内容や指導方法の検討や共通理解が必要である。
「主体的な活動場面の設定」や「言語活動の充実」などの指導の工夫や教師の指導の評価など,授業づくりの方法を更に明確化することが必要である。

3 授業づくりの視点について

「一貫性・系統性のある指導」を行うためには,教育課程と個別の指導計画の両方を十分に踏まえることが大切である。しかし,各学校においては前述のような課題が見られることから,複数の教師が,児童生徒の教育的ニーズや指導内容・指導方法について,共通理解しながら,取り組むことができるような「授業づくりの視点」をもつことが必要であると考えた。「授業づくりの視点」は,pdcaサイクルの各過程において,様々なものが考えられるが,まずは,評価・改善における視点を明らかにして,現在の授業の改善から始めることが効果的であると考えた。

そこで,今年度の研究では,評価・改善における授業づくりの視点として,「児童生徒の学習評価」,「教師の指導の評価」,「授業改善のための効果的な授業参観と授業検討会の進め方」について述べる。

(1) 児童生徒の学習評価

特別支援学校においては,個別の指導計画に基づいた学習への取組の様子を中心に,具体的に記述して学習評価することが多く実施されている。しかし,「関心・意欲・態度」,「思考・判断・表現」,「技能」,「知識・理解」の観点に基づいた記述が十分になされなかったり,一部の観点のみが記述されてしまったりしていることがある。

そこで,このような記述を中心とした評価を行う際には,中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」で示された,「関心・意欲・態度」,「思考・判断・表現」,「技能」,「知識・理解」の観点をより一層意識しながら記述することで,目標の到達状況がより明確になり,次の目標設定や指導内容の設定が具体化されると思われる。

(2) 教師の指導の評価

特別支援学校においては,児童生徒一人一人の実態に即して,個別に指導目標や指導内容を設

定し、個別に評価することになるが、設定した指導目標が高すぎたり、指導内容が具体性を欠いたりするなど、結果として、効果的な指導につながらないことも考えられる。このため、設定する指導目標や指導内容については、その妥当性の向上に十分配慮する必要がある。そこで、児童生徒の学習評価を踏まえ、目標や手立て、指導内容、指導方法の妥当性などを見直すといった教師の指導の評価が大切である。教師の指導の評価の観点例を次に示す。

領域	観 点 例	
A 指導 目標	ア	児童生徒の実態に即したものであったか。
	イ	具体的で児童生徒に分かりやすいものであったか。
	ウ	教師が評価しやすいものであったか。(数値や基準が示されていたか。)
B 指導 内容	ア	生活に生かすことを、指導内容として考えていたか。
	イ	児童生徒が、興味・関心をもちやすいものであったか。
	ウ	児童生徒が、見通しをもちやすいものであったか。
	エ	児童生徒が、成功経験を得やすいものであったか。
	オ	児童生徒の言語活動の充実が図られたか。
C 指導 方法	ア 学習活動 の見通し	(ア) 学習のねらいを明確に示していたか。 (イ) 学習の流れを明確に示していたか。
	イ 言葉掛け	(ア) 具体的で、分かりやすい発問や説明だったか。 (イ) 言葉掛けが多すぎたり、少なすぎたりしてはいなかったか。 (ウ) できたことや、取組の経過について形成的に賞賛していたか。
	ウ 個に応じ た工夫	(ア) 段階的な指導をしていたか。 (イ) 児童生徒の反応を確認していたか。 (ウ) 過剰援助や援助不足ではなかったか。
	エ 主体的な 活動	(ア) 児童生徒が、考える場面を設定していたか。 (イ) 児童生徒が、自己選択したり、自己決定したりする場面を設定していたか。 (ウ) 児童生徒が、役割に応じて活動できる場面を設定していたか。 (エ) 児童生徒が、報告したり、発表したりする場面を設定していたか。 (オ) 児童生徒が、伝え合う場面を設定していたか。
D 指導 体制	ア	学習集団の構成が工夫されていたか(個別、ペア、グループ、習熟度 など)。
	イ	事前のミーティング等で、児童生徒の実態や関わり方などが共通理解されていたか。
	ウ	チーム・ティーチングにおいて、指導者間の共通理解が図られていたか。
E 学習 環境	ア	児童生徒の注意を向けやすい学習環境が整っていたか。(掲示物の精選、板書の構造化 など)。
	イ	活動のしやすさを考慮した学習環境が整っていたか。(机の位置、座席、動線の工夫、教室内の整理・整頓 など)。
F 教材 ・ 教具	ア	児童生徒の実態に合った教材・教具であったか。
	イ	児童生徒が、興味・関心をもちやすい教材・教具であったか。
	ウ	効果的な教材・教具の提示の仕方を行っていたか。
	エ	コンピュータなどのICTを適切に活用していたか。
	オ	教材・教具等の準備や片付けなど児童生徒ができる活動を取り入れていたか。

(3) 授業改善のための効果的な授業参観と授業検討会の進め方

授業研究は、研究授業とその前後の取組を含めたもので、研究授業前の授業計画の作成、研究授業の実施、研究授業後の研究協議といった一連の活動として捉えることも大切なことである。

授業者だけが授業計画を作成するのではなく、協力者を決めて協議しながら作成すると、作成者が自分たちの授業として研究授業を共有することができ、研究授業後の授業研究でより率直な意見交換が期待できる。

また、実際に授業検討会を効果的・効率的に進めるために、学習指導案から確認しておく事項や授業を参観する観点を明確にしておくことも大切である。

【平成24年度調査研究発表会】
第7分科会（特別支援教育）研究発表

特別支援学校における 一貫性・系統性のある 指導の在り方に関する研究

鹿児島県総合教育センター

1

発表内容

- 1 研究主題について
- 2 実態調査について
- 3 授業づくりの視点について

2

特別支援学校の現状と課題

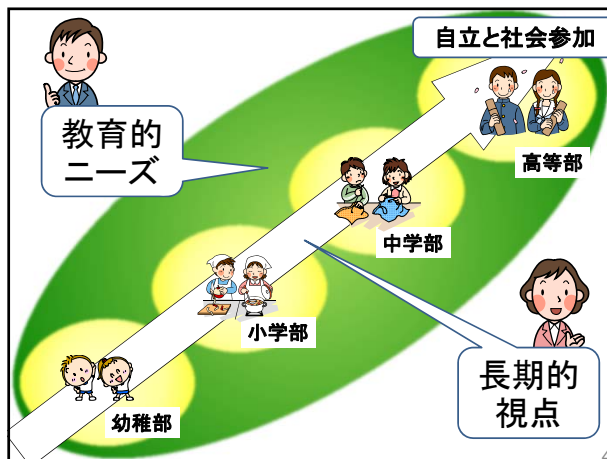
現状

- ◆ 一人一人に応じた指導の充実
 - ・ 的確な実態把握
 - ・ 個別の指導計画に基づくきめ細かな指導

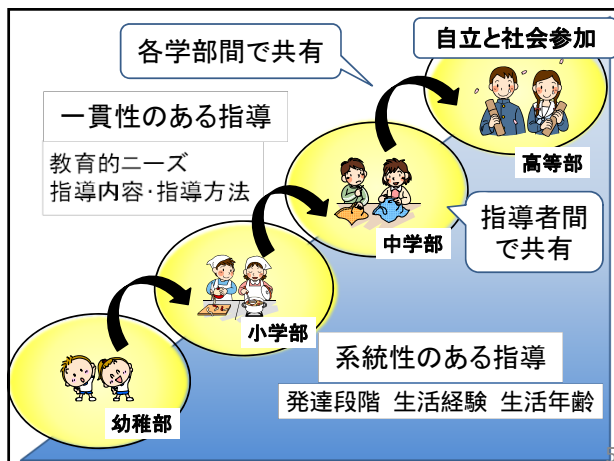
課題

- | | |
|----------|----------|
| 一貫性のある指導 | 系統性のある指導 |
| 個別の指導計画 | PDCAサイクル |

3



4



5

一貫性・系統性のある指導

一貫性

入学から卒業後までを見通した長期的な視点で、一人一人の教育的ニーズや指導内容・指導方法などを明らかにし、指導者間及び学部間で共有すること

系統性

各教科等の目標や内容を、発達段階や生活経験、生活年齢などを踏まえて設定すること

6

実態調査

【目的】

特別支援学校における一貫性・系統性のある指導の現状と課題を明らかにする。

【対象校】

全ての県立特別支援学校 16校

【学部の内訳】

幼稚部 1校 小学部 15校
 中学部 15校 高等部 14校

7

調査内容

- 1 教育課程の編成と実施（学校）
- 2 個別の指導計画の作成と活用（各学部）
- 3 知的障害のある児童生徒に対する授業づくり（各学部）
 「生活単元学習」、「国語」、「算数・数学」

中心的に推進している教師が回答

平成24年9月1日現在 質問紙法

8

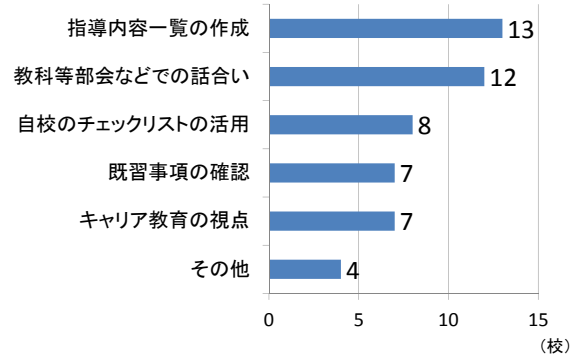
実態調査の結果と分析

1 教育課程の編成と実施について

- ◆ 系統性のある指導の工夫
- ◆ 編成上の課題
- ◆ 実施上の課題

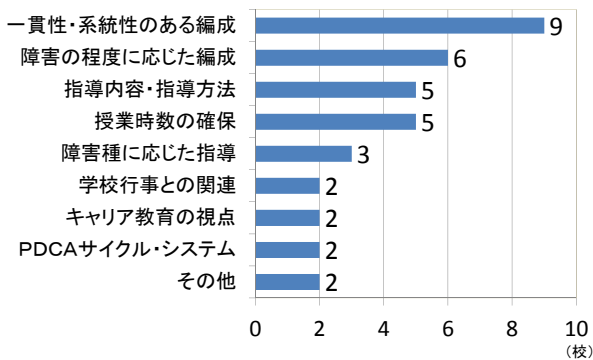
9

系統性のある指導の工夫（複数回答）



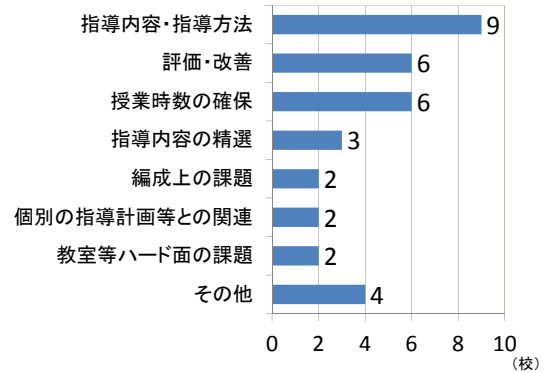
10

教育課程編成上の課題（複数回答）



11

教育課程実施上の課題（複数回答）



12

【教育課程に関する現状と課題】

現状

- ◆ 系統性のある指導を行うために、指導内容一覧の作成やチェックリストの活用などを工夫している。
- ◆ 一貫性・系統性のある教育課程の編成が難しい。
- ◆ 日々の実践において、学習内容の精選や指導方法の工夫が難しい。
- ◆ 教育課程の評価が、改善に生かされない。

課題

- ◆ 発達段階や生活経験などを踏まえた見直しが必要
- ◆ 一貫性・系統性を意識したシステムの検討が必要



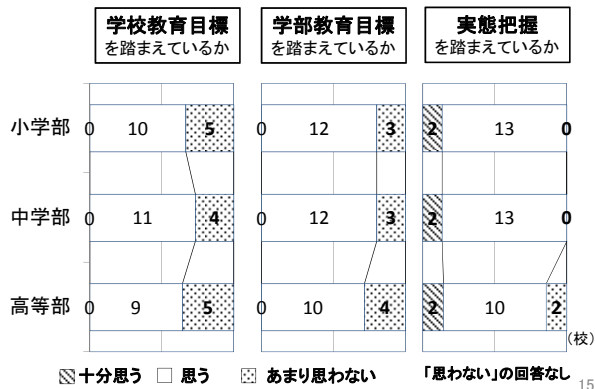
13

2 個別の指導計画の作成と活用について

- ◆ 指導目標の設定
- ◆ 内容の見直し
- ◆ 引継ぎ

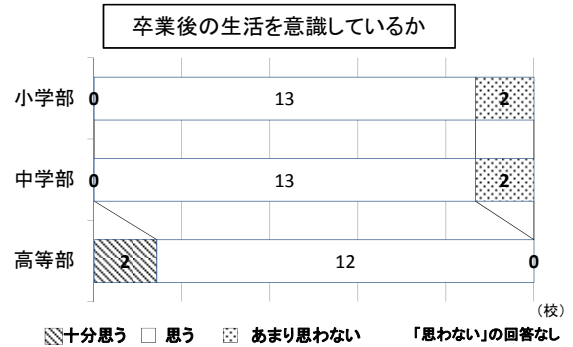
14

指導目標の設定



15

指導目標の設定



16

個別の指導計画の複数の教師による見直し

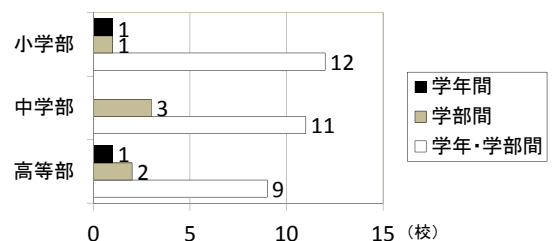
全ての学校で実施

【A特別支援学校の見直しのスケジュール】

学部	項目	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
小学部	ア 実態	■											
	イ 長期目標(1年)	■											
	ウ 短期目標(学期)	■	■										
	エ 指導内容	■	■										
中学部	ア 実態	■											
	イ 長期目標(1年)	■											
	ウ 短期目標(学期)	■	■										
	エ 指導内容	■	■										
高等部	ア 実態	■											
	イ 長期目標(1年)	■											
	ウ 短期目標(学期)	■	■										
	エ 指導内容	■	■										

17

個別の指導計画の引継会の実施



運用上の課題(自由記述)

引継ぎの内容や方法の工夫が必要

18

【個別の指導計画に関する現状と課題】

現状

- ◆ 指導目標の設定では，学校教育目標などよりも実態把握の結果が生かしやすい。
- ◆ 卒業後の生活を意識した目標設定は，小・中学部より，高等部において，より意識して行われている。
- ◆ 複数教師による検討や見直し，引継ぎは実施されているが，内容や時間設定などが十分ではない。

課題

- ◆ 学校教育目標や卒業後の生活などを更に意識することが必要
- ◆ より一層の指導者間での共通理解が必要



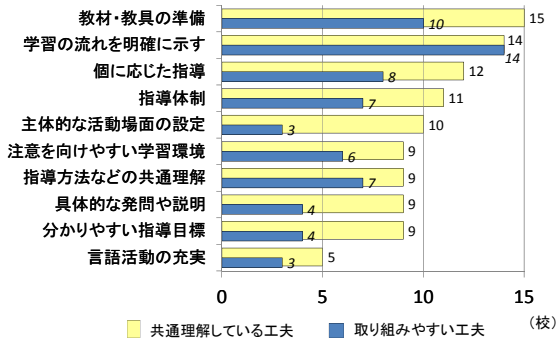
19

3 知的障害のある児童生徒に対する授業づくりについて (生活単元学習，国語，算数・数学)

- ◆ 指導の工夫
- ◆ 授業参観の実施
- ◆ 評価の方法

20

学部で共通理解している指導の工夫(複数回答) (小学部 生活単元学習)



21

研究授業以外の授業参観の実施

している 7校 ・ していない 9校

- ・ 参観週間の設定
- ・ 参観の視点
- ・ 授業改善の視点
- ・ 学部間の交流研修
- ・ 卒業学年の参観
- ・ アンケートの実施

22

研究授業以外の授業参観の成果

教師間の共通理解の深まり

授業改善のための新たな発見

系統性や将来を意識した
目標や内容の設定



23

評価

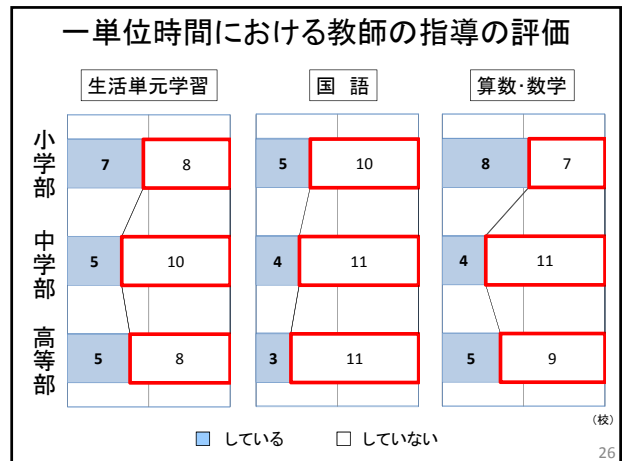
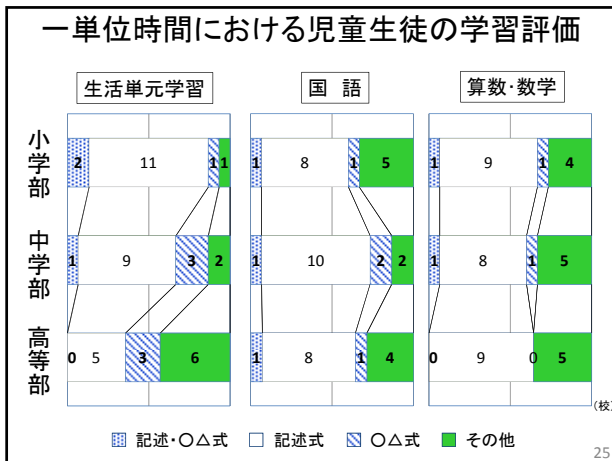
【学習評価】

一人一人の児童生徒の学習に対する意欲や態度，知識や技能などの習得状況などを客観的に捉えること

【教師の指導の評価】

児童生徒に対する学習評価を踏まえて，教師が，指導目標や指導内容，指導方法の妥当性など，自分の指導について振り返ること

24



教師の指導の評価を行っていない理由

- ◆ 評価の観点が分からない。
- ◆ 評価の観点が統一されていない。
- ◆ 時間の確保が難しい。

27

【授業づくりに関する現状と課題】

現状

- ◆ 「主体的な活動場面の設定」や「言語活動の充実」などは、取り組みにくい指導の工夫として挙げられ、授業では生かされにくい。
- ◆ 授業参観において、教師間・学部間の共通理解の深まりや、授業改善のための新たな発見などが成果として挙げられている。
- ◆ 教師の指導の評価が十分に行われていない。

課題

共通理解しにくい、取り組みにくい指導の工夫や、教師の指導の評価について、具体的な方法等を明らかにすることが必要

28

【一貫性・系統性のある指導の課題】

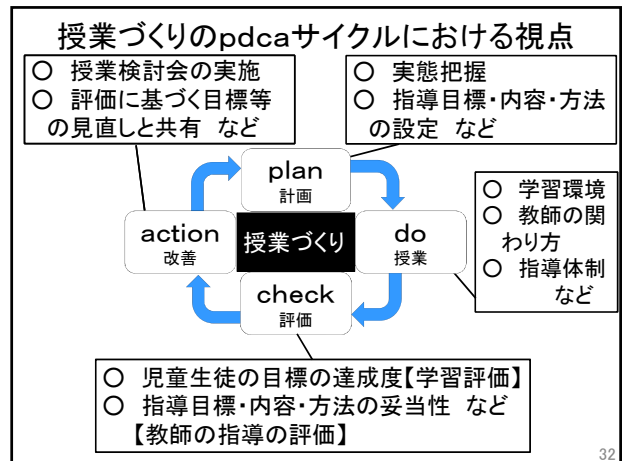
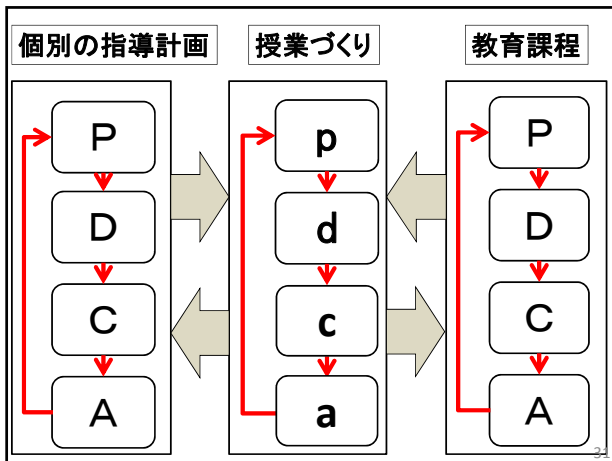
- ◆ 発達段階や生活経験などを踏まえて、チェックリストの活用や教科等部会等の話し合いなど、これまでの取組を見直す必要がある。
- ◆ 教育課程の編成における評価・改善、引継ぎのシステムを検討することが必要である。

29

【一貫性・系統性のある指導の課題】

- ◆ 指導者間における、指導内容や指導方法の検討や共通理解が必要である。
- ◆ 「主体的な活動場面の設定」、「言語活動の充実」など指導の工夫や、教師の指導の評価など、授業づくりの方法を更に明確化することが必要である。

30



評価・改善における授業づくりの視点

- 児童生徒の学習評価
- 教師の指導の評価
- 授業改善のための効果的な授業参観と授業検討会の進め方

教師の指導の評価の観点例

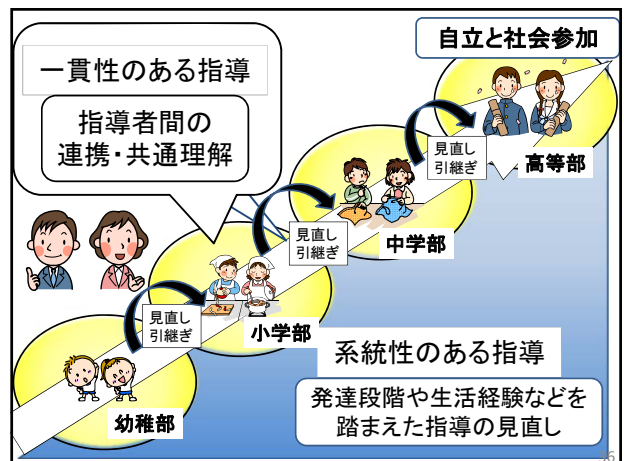
領域	観点例
A 指導目標	ア 児童生徒の実態に即したものであったか。
B 指導内容	ア 生活に生かすことを、指導内容として考えていたか。
C 指導方法	.
D 指導体制	.
E 学習環境	.
F 教材・教具	.

6領域 31項目
配布資料P4参照

領域	観点例
A 指導目標	ア 児童生徒の実態に即したものであったか。 イ 具体的に児童生徒に分かりやすいものであったか。
B 指導内容	ア 生活に生かすことを、指導内容として考えていたか。 イ 児童生徒の興味・関心をもちやすい教材・教具であったか。 エ 児童生徒の学習活動の受講し ア 言葉掛け イ 個に応じた工夫
C 指導方法	エ 主体活動
D 指導体制	ア 指導者の役割 イ 前の三 エ 授業
E 学習環境	ア 児童生徒の注意を向けやすい学習環境が整っていたか。 イ 掲示物の精選、板書の構造化 など エ 活動のしやすさを考慮した学習環境が整っていたか。 イ 机の位置、座席、動線の工夫、教室内の整理・整頓 など
F 教材・教具	ア 児童生徒の実態に合った教材・教具であったか。 イ 児童生徒の興味・関心をもちやすい教材・教具であったか。 エ 効果的な教材・教具の提示の仕方を行っていたか。 イ コンピュータなどのICTを適切に活用していたか。 エ 教材・教具等の準備や片付けなど児童生徒ができる活動を取り入れていたか。

【学習環境】

- 児童生徒の注意を向けやすい学習環境が整っていたか。
(掲示物の精選、板書の構造化 など)
- 活動のしやすさを考慮した学習環境が整っていたか。
(机の位置、座席、動線の工夫、教室内の整理・整頓 など)



「個別の指導計画に基づく授業づくりと評価の工夫」
～ 特別支援学校中学部数学科における取組～

県立牧之原養護学校
教諭 耳 田 ひとみ

1 本校の概要

(1) 児童生徒数（平成 24 年 12 月現在）

学 部	児 童 生 徒 数				
	標準学級（知的）	標準学級（肢体）	重複障害学級	訪問教育学級	合 計
小 学 部	55 人	1 人	18 人	3 人	77 人
中 学 部	53 人	0 人	3 人	2 人	58 人
高 等 部	90 人	0 人	11 人	11 人	112 人
合 計	198 人	1 人	32 人	16 人	247 人

(2) 学校教育目標

児童生徒の教育的ニーズを的確に把握し、一人一人の「生きる力」や個性を限りなく伸ばして、自立と社会参加に向けて心豊かに生きる児童生徒を育成する。

(3) 本校の特徴

ア 知的障害者を教育する特別支援学校として昭和 54 年に開校し、現在、肢体不自由や視覚障害・聴覚障害など様々な障害種の児童生徒を受け入れている。

イ 児童生徒数が増加傾向にある。

ウ 児童生徒の障害の多様化、重度・重複化に伴い、教育課程の類型や学級編制等で課題が多く見られるようになってきている。

エ 通学区域が広域にわたる中、就学や進路、福祉に関する関係機関との連携が進められている。

オ 今年度の研修のテーマとして、「『性に関する指導』の更なる充実を目指して～発達段階に応じた系統性のある指導の在り方について～」を設定し、指導計画の見直しや指導法、教材・教具の改善・開発を行い、児童生徒一人一人の実態に応じた指導の充実を目指している。

2 本校中学部数学科における授業づくりの課題

- (1) 年間指導計画の題材目標と個別の指導計画に基づく個人目標の関係性が十分に図られていない。
- (2) 生徒が興味・関心や意欲をもてる教材・教具の準備や活用が十分ではない。
- (3) 授業づくりにおいて、年間指導計画と個別の指導計画の P D C A サイクルが確立されていない。

3 授業づくりの実際

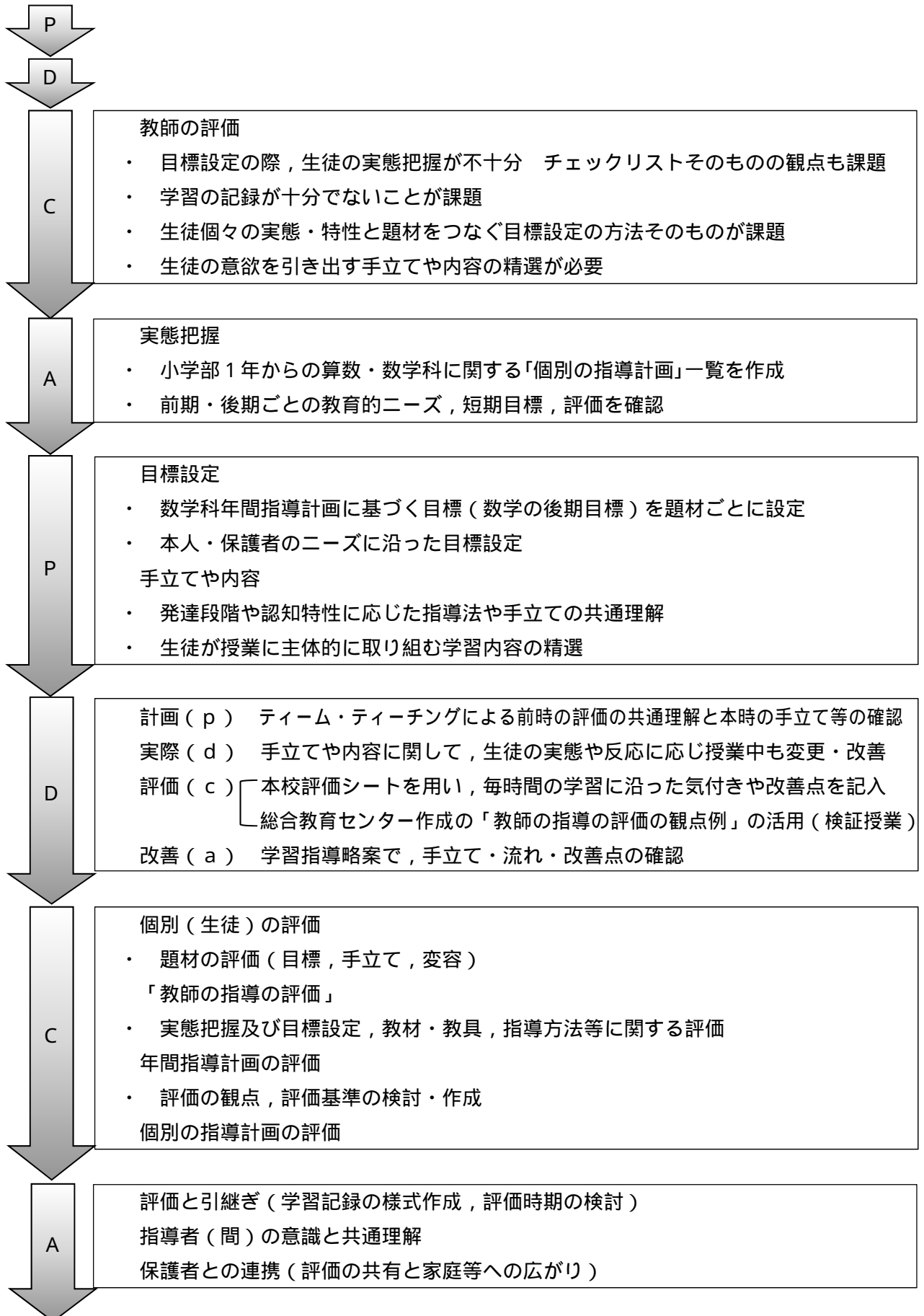
(1) 教育課程に関する意識調査から

ア 意識調査の目的：本校職員の教育課程編成作業への意識付けとして実施した。

イ 意識調査結果：年間指導計画や個別の指導計画を作成することが目的となり、評価と改善を意識した P D C A サイクルの授業づくりが十分行われているとは言えない。

(2) 評価と改善の視点を重視した授業づくり

「数学科年間指導計画」と「個別の指導計画」の関係性を踏まえ、1学期までの生徒、教師それぞれの評価と改善の視点を重視したPDCAサイクルに基づく授業に取り組んだ。



(3) 検証授業

ア 学部，教科，題材

中学部，数学科「ながさ・おもさ・ひろさ」

イ 対象生徒

中学部を習熟度別にグルーピングしたミドルグループ4人

ウ 考察

生徒が主体的に学習活動に取り組み，数量を体感できるように具体物やゲームを多く取り入れた。また，同じ学習活動を繰り返すことで見通しをもちやすくした。そして，チーム・ティーチングのよさを生かし，毎時間の生徒の活動量や変容を評価し，合わせて，教師の指導の評価を行った。毎時間ごとの評価を丁寧に行うことは，教師が指導上の改善を加え，生徒のより主体的な活動と変容を引き出すためにとても有効だったのではないかと考える。

(4) 評価の実施

ア 本校評価シートの活用

毎時間の生徒の活動の様子や変容，気付いた課題，改善案等を記入し，授業者間で共有することができた。

細かく書き込むと改善に有効であるが，作業量や効率的な活用を考慮すると観点の絞り込みが必要である。

本校独自の様式であるが，今後，活用の有効性を全職員で共通理解する必要がある。

イ 総合教育センター作成の「教師の指導の評価の観点例」の活用（検証授業後）

生徒の評価だけでなく，教師の指導の観点が示されていることにより，教師自身が授業を振り返り，指導について自己評価することが可能になった。

1時間ごとの評価・改善に適する項目と題材や単元などの評価に適する項目が混在しているため，評価を何につなげるのか，整理する必要がある。

検証授業後の「教師の指導の評価の観点例」の活用については，上述のとおり成果があったため，1学期に行った授業についても，再度「教師の指導の評価の観点例」を活用し，評価を実施した。その結果，十分達成されていたのは，「指導体制」のみという結果であった。

4 成果と課題

(1) 成果

ア 目標設定に必要な個々の実態把握や学習経験等のデータの活用方法が確立してきた。

イ 題材目標と個人目標の関係性を考慮した指導目標，指導内容や手立ての設定ができた。

ウ 興味・関心，意欲を引き出すための手立てや学習活動の設定ができた。

エ 「教師の指導の評価の観点例」を活用することで，観点を明確にした評価ができるようになった。

(2) 課題

ア 題材ごとの学習活動や生徒の変容等の記録の観点や様式を確立したい。

イ 生徒の実態把握や課題に対する教師間の共通理解の方法を探りたい。

ウ 手立てや指導方法の教師間の共有の在り方を探りたい。

エ 授業づくりにおけるPDCAサイクルのCA（評価・改善）の意識化を図りたい。

オ 教師個人レベルの取組を学校組織としての取組に変えていく働き掛けを図っていきたい。

カ 「教師の指導の評価の観点例」の項目の整理が必要である。

「生徒の主体的な活動を生かした授業づくりの工夫」

県立武岡台養護学校

教諭 上村 祐三子

1 本校の概要

(1) 児童生徒数等（平成24年12月現在）

学部	人数	児童生徒数		
		標準学級	重複障害学級	訪問教育学級
小学部		87人	22人	1人
中学部		78人	9人	0人
高等部		146人	16人	0人
合計		311人	47人	1人

(2) 学校教育目標

児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じた教育を行い、「生きる力」を身に付け、将来の自立や社会参加に向けて、「あかるく、なかよく、たくましく」生きる人間を育成する。

(3) 本校の特徴

ア 知的障害のある児童生徒を対象とする特別支援学校であるが、平成25年度から肢体不自由のある児童生徒の受け入れが始まり、知肢併置校となる。

イ 児童生徒は、鹿児島市内全域から通学している。通学方法は、7路線の通学バスと公共交通機関を利用する一部の中・高等部生徒の自主通学がある。

ウ 児童生徒数が多いため、学校行事においては、大運動会は、小・中学部は合同実施、高等部は単独実施している。（それぞれの予行練習では、他学部の競技の見学ができるように配慮している。）

エ 各学級の児童生徒の実態や人数を考慮し、小・中・高等部を縦割りにし、異学部の2学級の児童生徒が、年数回の校内交流を実施している。

オ 児童生徒の個別の教育支援計画や年度当初の様子等を基に、今後の支援の充実を図るために、年度始めに新旧の担任等で引継ぎを行っている。

2 本校高等部における授業づくりの課題

(1) 音楽、保健体育、美術など、授業での指導内容や役割分担などは、略案により指導者間で確認しているが、詳細な配慮事項などについては話合いを行っていない。

(2) 個別の指導計画を基に、高等部生徒の重点目標一覧を作成し、データで共有しているが、指導目標や指導内容など、指導者間での話合いの場がないために、全ての授業に生かされているとは言えない。

(3) 国語や数学は、学年ごとで習熟度に合わせたグループ編成を行い、担任以外の生徒を担当することもある。担当者は、毎時間の授業の生徒の学習評価では、記述式や 式で評価をしているが、評価の観点や方法を学校や学部で統一していないため、主観的な評価になってしまうことがある。

(4) 各単元・題材の実践を振り返り、次年度の全体計画や年間指導計画を見直し、改善する取組は、各担当者によって異なり、学校、学部としての体制ができていないため、授業改善までつながりにくい。そのため、授業の評価、見直し、改善を年間指導計画に効果的に生かしていくことができるシステムが必要である。

3 検証授業（高等部 総合的な学習の時間 単元名「学校をきれいにしよう」）

(1) 対象生徒

3年標準学級（男子2人，女子3人）

(2) ねらい等

日常生活や社会で関わりのある掃除の仕方について調べたり、話し合ったりして、自分からチャレンジし、自分の生活に生かそうとする力を身に付け、自らやる気と自信をもって取り組むことができるようにする。さらに、他者の意見を受け入れながら他者のよさを発見し、自分のよさにも気づき、可能性を実感しながら、自分の人生や将来、職業について、考えを発展させていくことができるようにする。

4 検証授業の授業づくりについて

(1) 授業づくりにおいて留意したこと

ア 生徒の学習意欲を向上させるために、生徒がお互いに認め合う雰囲気づくりと生徒への賞賛の言葉掛けに努めた。

イ 自分自身を振り返る機会が少なく、個々の生徒の自己評価と能力との差が大きくなりがちな生徒の実態から、活動内容を細分化することで生徒が自分の課題に気づき、自信のある活動から段階的に、見通しをもちながら取り組める指導内容を構成した。

ウ 友達の学習活動を見て、良かった点や改善すべき点などを考えることで、自分の学習活動を振り返り、更に深く考えることができるような生徒相互の評価を生かした学び合いに努めた。

(2) 授業づくりにおいて取り組みにくかったこと

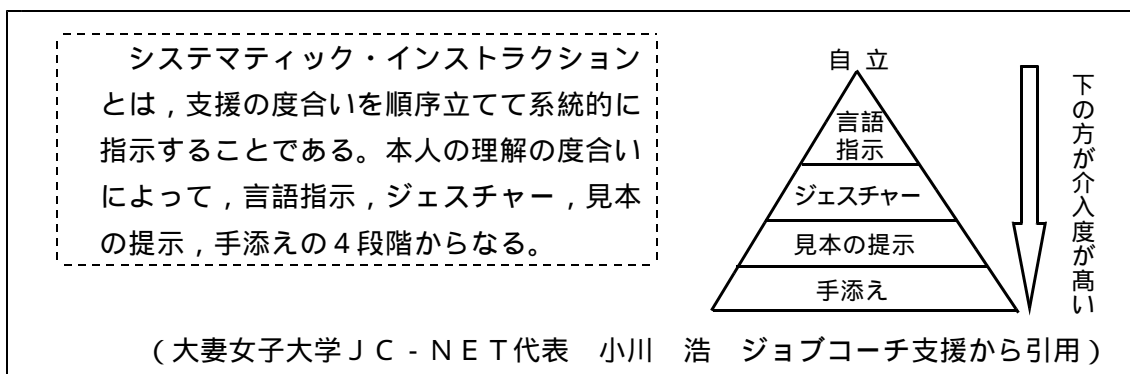
ア 授業を構成する上で、指導目標や指導内容などの設定が難しかった。

イ 総合的な学習の時間、生活単元学習、作業学習、特別活動等との関連や目標、内容の明確化など、教育課程における学部間での系統性等の課題があり、具体的な指導方法を考えにくく、学部としての授業づくりの明確な観点が必要だと感じた。

(3) 授業における具体的な工夫

ア 作業手順の一覧表の作成や色分けした手順の表示など視覚的な分かりやすい教材準備や場の設定など学習環境づくりに心掛けた。

イ システムティック・インストラクションを活用し、指導・支援について適切かつ最小限の支援を行った。



ウ 活動場面では、デジタルカメラでの撮影やストップウォッチの計時などの役割を生徒に分担し、生徒同士の関わる場面を多く設定し、他の生徒の学習場面を真剣に見るようにした。

エ ビデオカメラを使い、自分や他の生徒の学習場面や振り返りを行うことで、自己評価や他者評価など正しい理解や学習を心掛けた。

オ 進路指導主任が、授業に参加し、生徒の学習活動に直接アドバイスをすることで、生徒が更に真剣に学習活動に取り組み、客観的に評価することができるようにした。

(4) 評価

ア 学習評価については、生徒自身が記述して振り返ったり、まとめたりする評価方法や、客観的な項目に基づく評価、他者からの評価など様々な評価方法を取り入れた。

(ア) ワークシート 「チェック式の評価」

(イ) ワークシート 「記述式の感想や反省」

(ウ) 他者からの評価（他の生徒、進路指導主任など他の教師）

(エ) まとめシート（机拭きや床掃きのポイントをまとめさせることで理解度を高める。）

イ 教師の指導の評価については、進路指導主任による評価と、総合教育センターが作成した「教師の指導の評価の観点例」を基に、授業参観シートを作成し、評価を行った。

(ア) 進路指導主任からの評価

(イ) 授業参観シート（授業者、参観者）

5 成果と課題

(1) 成果

ア 生徒ができる、できそうな状況からステップアップしていく充実感を得ることができた。

イ 授業の中で、同じような内容（机拭き、床掃き）を繰り返し学習する場を設定することで、生徒が自信をもって取り組んだり、深く考えたりすることができた。

ウ 振り返りや友達の良かったところを発表することで、技能面や意欲の向上につながった。

エ システムティック・インストラクションを活用したことで、様々な場面での課題分析の大切さが理解できた。

オ 生徒も授業者も他の職員から評価してもらうことで、客観的な評価を得ることができ、次の授業に生かした。

カ 授業づくりをする際に、総合教育センター作成の「教師の指導の評価の観点例」を参考に授業を組み立てることができれば、生徒への指導・支援の観点を整理し、よりよい授業を構成することができ、学習評価や教師の指導の評価も一体化したものになるのではないかと考える。

(2) 課題

ア 進路指導主任との事前の指導内容などの十分な話し合いや打合せが不足していたため、チーム・ティーチングを行う上での、打合せシートを作成して、共通理解を図る。

イ 学校全体で、授業参観シートを作成し、活用することで、授業改善ができるようにするとともに、授業の評価・改善のシステムづくりも必要である。

ウ 総合教育センター作成の「教師の指導の評価の観点例」の項目が多いため、授業において参観してほしい部分の項目を抜き出し、4段階の判断基準を明確にすると、更に活用しやすくなるのではないかとと思われる。